



その種が飛んできたことは、事故でしかありませんでした。すでにたくさんの種が、お行儀よく一列に植えられていた土でしたが、今さらどうしようもないので、仕方なく、他の種と同じようにしてやることにしました。

やがて、飛んできた種は、他の種から少し遅れて芽を出しました。しかしぐんぐん背を伸ばし、他の種たちが出したどの芽よりも、ちょっぴりのっぽになりました。そして、他の種たちはみんな、黄色のお花を咲かせましたが、飛んできた種は、紫色のお花を咲かせました。

土はそれが気に入りませんでしたので、大雨の夜、紫色のお花が植わっているところにエイと力を入れて、紫色のお花を、黄色のお花たちの列から追い出しました。

紫色のお花は、悲しくなったので泣きました。涙はとても美しかったのですが、大雨で、そして真っ暗でしたので、誰の目にも留まりませんでした。

夜が明けると、紫色のお花は、泣いてばかりもいられないと思いました。根っこが外に出いたので、このままではからからになってしまいます。ときどき吹く風にうまく身を任せて転がって、黄色のお花たちの列からできるだけ離れたところに、といっても、ほんの二、三步のところなのですが、そこにうまく根っこをねじ込むことができました。

それからの毎日は、穏やかに過ぎていきました。決まってお昼過ぎにやってきて、そうっと花びらを撫でてくれる暖かい風のが、大好きになりました。しかしその風は、黄色のお花たちのことも撫でていて、紫色のお花は、大変やきもちをやきましたが、それでもその風のが大好きで、毎日、太陽が真上にやってくる少し前から、花びらをやや大きめに開いて、撫でてもらえるそのときを、じいっと待っているのです。

黄色のお花たちは、背丈が紫色のお花と同じくらいになった頃、五、六本ずつ摘まれて、どこかへもらわれていくようになりました。土は、寂しくも誇らしい気持ちで、もらわれていく黄色のお花たちのことを見送りました。紫色のお花は、誰からも摘んでもらえませんでした。余所者の種は、どんなに美しい花を咲かせたところで、所詮は余所者の花でしかなく、誰からも必要とされることはないのです。

やがて、冬がやってきました。お昼過ぎの風はいつの間にか冷たくなっていて、紫色のお花は、すっかりつまらなくなってしまいました。

いつもよりぐんと寒くなったある日、雪が降りました。初めて触れる雪の、あまりの冷たさに、紫色のお花は、花びらをきゅうっと縮こませながら、だんだんと白くなっていく周りの景色を、ぼんやりと見つめていました。

もっと、たくさん降ればいいのに――紫色のお花は思いました。もうずっと目の前にあった、青い石と、茶色い石に、うっすら雪が積もっていて、どちらがどちらかわからなくなりそうなのを見て、もっと、もっと、たくさん降れば、二、三步離れたところで生きる黄色のお花たちとも、そんなふうになれそうだと思ったのです。

雪は三日ほど降り続けました。黄色のお花も、紫色のお花も、土も、風も、みんなみんな真っ白になって眠りました。やっと太陽が目を覚まして、ふたつの真っ白いかたまりがそれぞれ、青い石と、茶色い石に戻った頃、すべてがきらきらと輝いている中で、土は、眠ったままの黄色のお花たちを抱いて、ひっそりと泣き濡れていましたが、その涙は、紫色のお花のところまでは届きませんでした。

やがて、からからになった紫色のお花は、風に連れられて、また余所の土のもとへと飛んでいきました。その様子を、土は、じっと見つめていました。土は、ずっとそこにいました。

もうすぐ、新しい種が植えられる頃です。種が黄色のお花になるまで育てたあとは、またからっぽになります。土は、ここで、それを繰り返すだけです。

家を出ることになった。

このところ、ついてない。ずっと全身がだるく、寝ても疲れがとれない。そのせいで仕事に集中できず、電話をかけてきた相手の名前を聞き間違えたり、違う相手に繋いでしまったり、打ち合わせの日を間違えたりといったしょうもないミスも、何度も何度も繰り返していた。

リエとのデートもそうだ。うっかり忘れてしまったり、体調が悪くて出かけられなかったりで、ここ一ヶ月はまともに会えていなかった。

リエはもともと自分に自信が持てないタイプで、しかも疑い深い性格だった。他に女ができたと思ひ込んだらしく、

自棄を起こして、嫁に全部話しやがった。

それで俺は家を出ることになった。

嫁からは、今月中に出て行けと言われた。あと約三週間だ。金額は未定だが慰謝料を支払うことは確実なので、できるだけ家賃の安い物件を、急いで探す必要があった。

不動産会社に足を運び、予算に見合ったアパートをいくつか見せてもらった。別に、俺が住むだけなのだから、どんな物件でもよかった。こだわりも特にないので、その日のうちにすぐ、比較的新しい2DKのアパートを借りることにした。

そのアパートにはインターホンがついていた。それが決め手だった。インターホンがほしかったわけじゃないが、どこも似たり寄ったりな造りだったので、どうせ借りるなら少しくらい変わったところがあった方がと思っただけだ。

2DKは広すぎるような気もしたが、予算内だったし、たぶん何年も住むことになるのだから、窮屈な部屋で暮らすよりはいいと思った。

嫁が引越しの手伝いなどしてくれるはずもなく、入居前の掃除には、母が手伝いに来てくれた。

「死んだ父さんも泣いてるよ、人の道を外れたようなまねをして」

というような小言を、始終言われ通しだったが。

窓の棧や台所のシンクなど、手際よく部屋中の掃除を進める母。俺は掃除などし慣れていないし、何をどうしたらいいのかわからず、まずインターホンをきれいに磨いた。受話器を耳に当てると、車が通る音や、アパートの前を歩く人の話し声が聞こえた。

掃除を終えると、母は鞆の中からビニール袋を取り出した。中には塩が入っていた。

「これをね、入居の前に玄関と水周りに盛りなさい」

俺はこういう迷信みたいなのが大嫌いだったが、母の性格上、断るとぎゃあぎゃあ言い出して面倒なので、ありがとうとだけ言って受け取った。

もとの家から新しい家までは、車で四十分程度で行ける距離なので、仕事が終わった後や休みの日に、少しずつ荷物を運び込んでいた。

そして、今月最後の休日。昼の十二時から二時までの間に冷蔵庫などの家電を配達してもらうことにしていたので、十一時半にアパートに行き、電器屋を待っていた。

ピンポン

チャイムが鳴った。俺は年甲斐もなくわくわくしながらインターホンのところへ駆けつけ、初めて「はい」と返事をするために受話器を取ると、

ガガガガガガガガガガガガ

という激しい音がして、とてもじゃないけれど耳に近づけることができず、仕方なく玄関まで行き、「はい」と返事をした。

家電を設置してもらっている間も、受話器を上げたり下げたりしてみたが、常にガガガガガという音がした。

入居して早々壊れてしまったのか？俺は本当についてない。電器屋が帰ったら大家に電話することにした。訪ねてくる人なんて滅多にいないと思うが、せつかくあるのだし、これがこのアパートを選んだ理由だったので、できれば修理してほしいと思った。

俺がガガガガガという音を繰り返し聞いている間に、電器屋はさっさと仕事を終えて帰っていった。説明書をまとめてガステーブルのところに置いてくれていたので、それをレターケースにしまおうと手にとったとき、台所のシンクに置きっぱなしになっていた塩が目に入った。

そういえば、盛り塩をしていなかった。ほとんど荷物を運び終わっている。母は入居前にと言っていたが、今からでもいいのだろうか？

めんどくさいと思いつつも、やはり母が置いていった半紙を並べ、均等に塩を盛っていった。ちゃんとしたやり方なんてわからないし、霊だとか神様だとか、そういうのは信じていないけれど、塩を半紙の上に盛っていると、心がなんとなくざわざわした。

とりあえず、玄関、トイレ、洗面所、風呂場、洗濯機置き場にひとつずつ置いていって、「遅れてすみません」

と、心の中でつぶやきながら手を合わせてみた。

天気予報で晴れのち曇りと言っていたが、その予報通り、外がどんよりと曇ってきた。なんとなく気味が悪くなり、盛り塩も終わったし、今日はもう帰ろうと思った。

玄関で靴を履こうとしたとき、インターホンのことを思い出した。そうだ、大家に電話するんだ。しかし、わざわざ来てもらって異常なしではあまりにも申し訳ないので、最後にもう一度、不調であることを確認しようと思い、受話器を取った。

「！」

すると、さっきまでのガガガガガという音はしなくなっていて、あの掃除の日のように、車の音が静かに聞こえてきた。

盛り塩をした途端にあの音がしなくなった。……というのは事実だが、そんな非科学的なことを信じたくなかった。一時的に電気系統の調子が悪かったか、外のマイクのそばで、何かの作業をしていたのだろう。

さっさと帰ろうと思い、受話器を耳から離そうとしたとき、
「もう遅いんだよ」
という、男なのか女なのかわからない声が、目の前の壁から聞こえた。

昨日、派手に転びました。

今日、まだ地面にベタツとなっている状態です。

だれもかれも、見てみぬふりで通り過ぎていきます。

「大丈夫ですか？」

と声をかけてくれる人もたまにいましたが、それは

「今日もいいお天気ですね」

と言われたのと同じようなものでした。

涙で濡れた頬から顎にかけて、砂や小石がはりつきます。しばらくするとまた涙が溢れ出し、それらは洗い流されていくのですが、またがくんとうなだれたときに、またはりついてしまいます。

こんなに派手に転んだのは半年ぶりです。そのときは自分でつまづいたのですが、昨日は、突き飛ばされて転びました。

その力がとても強かったので、私の身体は軽く宙に浮き、また、突然のことだったので、受け身もままならず、顔から地面にたたき付けられるような格好になりました。

もしかしたら、背中に赤く手形が残っているんじゃないかしら。ああ、でももう青く変色している頃かしら。

転んだときには、道端に咲いている小さなお花を見つけたりします。いつも歩いている道なのに、いつもは気付かないのです。

そのお花をお部屋に飾ったり、押し花にしてしおりを作ったりしたいな。と思うと、自然と身体は起き上がり、そっとお花を摘んで、歩いて家に帰ります。

だけど今転んでいる場所は、ごみや荊やごつごつした石ばかり。たまに気持ちの悪い虫が飛んできてぶんぶん騒ぐので、耳を塞いで、顔を伏せます。

虫が去って顔を上げて、やっぱりそこにはごみ、荊、石。いつの間にか、雨雲まで立ち込めてきました。顔は、よりたくさんの砂でまみれていますが、やがてまた溢れてくる涙や、雨が流してくれるはずで。

私は私を突き飛ばした人たちを、とても憎く思っています。だから、ここから起き上がるときには、その人たちみんなが羨むようななにかを拾って、それを思いきり見せびらかしてやろうと思っているのです。

今のところ、まだ見つかっていませんが、それはどこかにあるはずで。ごみの中か、荊の奥か。もしかすると、そのへんの石は宝石なのかもしれません。

けれどどうしても見つからないときは、あの人たちが私のそばに歩いてきたときに、その足を引っつかむか、予め荊をはりめぐらせておくかして、あの人たちも転ばせます。そんなおそろ

しいことを考えています。

しかし不思議です。こんなに派手に転んだというのに、どこも痛くはないのです。

会いたいなあとと思うと電話がかかってくる――そういったことは、昔からよくありました。

たびたび起こる不思議な現象のほとんどには、何らかの科学的な裏付けがある。ということが解明されている現代を生きる、いい歳をした私です。が、散らかり放題の机の上で山積みになっている未処理の伝票や、数字が同じ順で仲良く並び続けて久しい給与明細、深くなる一方のほうれい線なんかよりは、やっぱり、夢を見ていたい私なのでした。

大好きなあの人は、私の住んでいる九州からは遠く離れた、関東に住んでいます。私は、あの人の文章が大好きです。あの人のブログを読んでいる時間が、一日の中でいちばんたのしいのです。

あの人は、お酒が大好きです。私もです。いつか、一緒に飲みたいな。ずっと、ずっと思っていました。

すると、叶いました。ある秋の日のことでした。

私たちは、お互いのブログにときどきコメントをし合うだけの関係で、連絡先なんて当然知らなかったのですが、あの人から、ブログについているメッセージ機能を使って、お誘いがあったのです。「来年の頭くらいに、そちらの方へ出張に行きます。もし都合が合えば、一緒に飲みませんか？」

きっと夢だと思いました。が、次の日の朝、歯磨きをしながらもう一度メッセージボックスを開くと、あの人からのメッセージはちゃんとありました。お返事をしたのは、その日のお昼休み、やっぱり歯磨きをしながら、朝と同じ内容のメッセージが変わらずそこにあることを、もう一度、確認してからのことでした。「ありがとうございます。なんだか夢みたいです。お会いできる日を楽しみにしています」

時間は、たっぷりありました。私はほんの少しだけ、きれいになったと思います。あの人は、どんな気持ちで待っていたのでしょうか、初めて会う日のことを。私は、初めはうれしいばかりでしたが、その日が近づくにつれ、すみっこにあった不安がぶくぶくとふくらんで、でもうれしい気持ちも同じだけふくらんで、約束の日の一週間ほど前から当日まで、いつばらばらになってもおかしくないような心持ちで過ごしていました。

がっかりさせてしまったら、どうしよう。うまく話せなかったら、どうしよう。今までみたいに、ブログを読んでくれなくなったら、どうしよう。そんなことばかり考えていました。そして、あともう少し、きれいになりたいと思いました。

でも、現実には厳しく、私の美貌は中の下のまま、約束の日を迎えました。「ごめんなさい」と、居酒屋さんで向かい合って座った直後に謝りました。「がっかりしたでしょう？」

「どうして？」

「太ってるし、かわいくないし、老けてるし……。あと、私、話すのも苦手です。人見知りも激しくて。ほんとごめんなさい」

「そんなことはないですよ。……そうですねえ、長澤まさみに似てると思います」

あの人は、とても大人でした。お店の壁に飾ってあった絵とか、お皿の模様とか、こじやれた箸袋とか、ついそういうのばかり見てしまって、あの人の見た目がどうだったかというのは、正直なところ覚えていません。ただ、ブログの文章からイメージしていた通りのやわらかい雰囲気だったことと、話し方が、標準語だというせいもあるのかもしれませんが、とてもやさしかったことは、今でもはっきりと覚えています。

お酒が手伝ってくれたこともあって、緊張は少しずつ解れて、あの人の仕事の話を中心に、好きな小説、過去の恋愛、その他、他愛のない話をしながら、とてもとてもたのしい時間を過ごしたのですが、そういった時間は、あっという間に過ぎていきます。終電の時間が迫り、私たちはさよならを言いました。

あの人がホテルに向かって歩き出すよりも先に、駅の方に足を向けた私でしたが、あまりにもたのしかったせいで飲み過ぎていたようで、足もとがふらつきました。あ、いけないと、壁につこうとした手は、しっかりと、根元から、あの人が受け止めてくれました。一瞬のことでしたが、その間に、あの人のぬくもりを感じ、身体中が温かくなり、あの人の薬指で光る指輪を睨みつけることまでできました。

翌日の午前中は夢見心地で過ごしたものの、午後からは不安が、のそのそと起き上がってきました。長澤まさみ似だなんて、お世辞としか思えません。あの人は大人です。私のことを傷つけまいと、きっとたくさん気を遣ってくれていたはずですが。昨日の自分の発言を振り返ってみても、くだらないことばかり言っていたような気がします。ああ、どうしよう、どうしよう、どうしよう——そう思っていると、メールが届きました。あの人がからでした。「昨日はありがとうございました。楽しかったし、かわいかったですよ。これから帰ります。また会えるといいですね」

あれから何年か経ちましたが、どうしてるのかなと思うと「お元気ですか？」とメールが届いたり、無性にメールしてみたくなった日のあの人のブログには、ちょっとした愚痴が書かれてあったりといったことがよくあって、私ってテレパシーが使えるのかな、などと思う日々です。

でもそれは実際のところ、私がいつもあの人のことを考えているというだけのことであって、携帯を開いた瞬間にあの人からメールが届くのだって、暇さえあれば、あの人からもらったメールを読み返しているからというだけのことでしかないのです。

もしも本当にテレパシーが使えるとしたら、あの人がつらいときを察して、思わず笑ってしまうようなたのしいメールと一緒に、「また会いたいです」という気持ちを送ります。それだけで十分です。実は未来がすでに決まっていて、会える日は、もう二度と来ないことになっているのだとしても。

そんなことを夢見ながら、今日もまた、次から次へと湧いてくる伝票や、数字の変わらない給与明細、あの頃より深くなったほうれい線なんかとにらめっこする私なのでした。

海が青いのは空の青が反射しているからだ、みなさんそう思っただけなのでしょう。そのようなものなのですが、実はね、ちょっとだけ違うのです。

気づいたときにはここにいる、初めて見たものは、空でした。私はそれからというもの、（とんでもない量の灰や塵が舞い上がったせいで全く見えなくなったときが二、三度ありましたが、それ以外は）ずっと、空を見つめ続けています。

空は、何でも知っています。空は、私と、私の表面に浮いている陸、そしてその上で起こっているあれこれを、すべて見つめているのです。草が生えたこと、虫の種類が増えたこと、その代わり別の種が絶滅したこと――空は、たくさんのお話を教えてくれました。

ご存知ですか。私たち、おしゃべりをしているのですよ。もっとも、私たちはとても遠いので、お互いの声は聞こえません。どうやっているのかというと、雨を使うのです。空は、言葉を雨に詰め込みます。手紙のようなものですね。

ある日、空はこんな言葉を降らせてきました。「きみはすごいね。小さな生きものがどんどん進化しているけれど、そのはじまりをつくったのはきみなだから。ぼくなんて、それをただじっと見ているだけ」。

いつだったか、もうずっと前のことなのではっきりとは覚えていないのですが、私の中で、確かに何かが生まれました。けれどそれは、それ自身が勝手にそうしただけであって、私がどうこうしたわけではないのです。

私は何もすごい、あなたの方がよほどすごいわ、何でも知っているし、毎日、とっても素敵な色を見せてくれるじゃない――そう伝えたいのですが、空へ向かって雨を降らせることなどできるはずがありません。

そこで私は、空がどれほど美しいかを伝えたい一心で、空の色を真似ることにしました。だから、空が青ければ青くなるし、赤くなれば赤くなります。そういうわけなので、ただ単に反射しているのではなくて、私が自発的に空色になっているのです。

「太陽が沈みかけたとき、きみはとっても赤くなるよね。そのときの色がすごく好きなんだ」

ある日、そんな言葉が降ってきました。空が好きだと言っているのは空自身の色なのですが、その言葉に、私の表面がざわめきました。

それからというもの、私はいつもゆらゆらしています。空によると、私はゆれる度、きらきらと輝いているそうです。そしてそれが、とてもきれいなのだそうです。その言葉が届いてからしばらくの間、私のゆれ方は倍ほどになってしまって、魚たちなどには迷惑をかけていたのではないかと思います。

ところで、船や飛行機からいろんなものが落ちてきては私の底に沈んでいくのですが、すべてのものは落ちるようにできているのでしょうか。そうすると、空もいつか、落ちてしまうのでしょうか。

実は、少しだけ期待しています。そんなことになれば、空のあった場所に残った何かなのか新たに生まれた何かなのか、それはわかりませんが、同じものを、空と一緒に見つめることができますよね。とても素敵なことだと思いますか。想像しただけで、また大きくゆれてしまいそうです。

だけど、もしも本当にそうなったときは.....私は、どんな色をしているのかしら。何色にでもなれるけど、もともと、なりたい色なんてないのです。

「うわぁ、おっきいうさぎさんだ！」

うさぎは突然やってきた。小学校の運動場みたいに広い庭。子どもたちは、小さなブーケを持ったうさぎを一斉に取り囲む。緑色の芝生に置かれたまっ白なテーブルの上に、めいっぱい並んでいるフライドチキン、ハンバーガー、フルーツパンチ……。みんな大好きなそれらが、一瞬にして庭のオブジェになった。

今日はジョニーの7回目のお誕生会。学校に通うようになって、去年よりもたくさんの友達が来てくれていた。

「あなた、あれは……？」

キッチンでパスタをゆでていたキャシーが、庭の様子に驚いてマークに尋ねる。マークはすぐに庭に出ていこうとしたが、その間に急にふふふと笑い出した。

「そういえば……今年は一風変わったプレゼントを贈るからって兄さんが言ってたんだ。これのことだったんだな」

持っていたブーケをジョニーに手渡すと、うさぎはうれしそうにぴょんぴょんと2回ほど小さく跳ね、庭を走り始めた。

「待って！ うさぎさん、一緒に遊ぼうよ！」

出会ったばかりだというのに、子どもたちはうさぎのことが大好きになった。手をつないで、歌を歌って、踊ったり、追いかけてっこをしたり。途中でマークが写真を撮った。ジョニーとうさぎが真ん中。そこに写っているみんなが、これ以上ないくらいの笑顔だった。

あっという間に、空はオレンジ色になっていた。もう何時間も遊んでいたが、子どもたちはまだまだうさぎと遊びたかった。

見兼ねたマークが、「おい、うさぎさん。ちょっと来てくれ！」と、うさぎをポーチまで呼び寄せた。

「今日はありがとう。兄さんによろしく」

うさぎの頬に顔を近づけて小声でつぶやくと、子どもたちに言った。

「みんな！ うさぎさんはそろそろ帰らなきゃいけないそうだ。みんなでお見送りしよう」

ひとりひとりにハグをし、何度も何度も振り返りつつ、うさぎはスキップでジョニーの家を後にした。うさぎが振り返る度、子どもたちは手がちぎれてしまうんじゃないかと思うほど力いっぱい手を振った。空は薄い紫色に変わっていて、みんなそれぞれ迎えに来てくれたお父さんやお母さんと一緒に家に帰った。

ジョニーの家から一番近い公園に、木がたくさん植わっていて、ちょっとした茂みになっている場所があった。うさぎはそこによろよると入っていくと、周りの様子をうかがってから膝をついて座った。

ジジジジジジ……

ジッパーの音が耳に響く。もしかしたら、世界中のみんなにこの音が聞こえてるんじゃないだろうか。そして明日、学校帰りにみんながうちに押しかけてきて、僕のことを責めるんじゃないだろうか——汗だくのサザビーは、そんなことを思った。数時間ぶりに触れる空気は、ちょっぴ

りひんやりとしていた。

一番大きな木の下に、抜けがらになったうさぎのぬいぐるみを座らせた。いつか町に来た移動式遊園地が、次の町へ移動するときにトラックから落としていった物だった。サザビーがこっそり拾って、今日まで倉庫に隠しておいたのだ。

「今日はとっても楽しかった。みんなと遊んだの、どれくらいぶりかな」

木にもたれてぐにやりとなったうさぎをしばらく見つめてから、サザビーはひとりで歩いて帰った。明日からはまた、学校へ行くみんなの姿を窓から見下ろす毎日を繰り返す。空はもう真っ黒で、サザビーの影法師すらいなくなっていた。

Where is...

「ステレオの上に置いてあった腕時計を知らないかい。四角形で、鶯色の。ウン、大した物ではないから、なければそれでいいのだけれど」質に入れたわ、二ヶ月前に。今日まで気付かなかったうえに、貴方は忘れているのね、私からの贈り物だったってこと。「知らないわ」貴方など、もう。

予報

昨日半分寝ながら天気予報見てて、へえ、濃霧警報か~と思ってたらノーム警報だった（聞き間違いとか思い違いね）。排水口とかに目ばりしてなかったから小さいおっさん入り放題。今朝、下駄箱開けたら10人くらいワッて出てきてビビった。害はないけどキモいよね。

存在価値

あなたはときどき、訳もなく私を見つめては、穏やかに微笑みかけてくれます。私にはそれがとってもうれしくて、もっと輝いていようと思うのでした。今日は、私たちが出会ったお店に来ています。「このダイヤ、再鑑定よろしく」。それが、最後に聞いたあなたの声でした。

花

花のような、という喩えがぴったりな人が死んだ。孤独死だった。妙な臭いがするという通報で発見された。斎場は、いろんな人から届いた花とその匂いで満ちている。この花も直に死に、腐る――彼女のように。彼女は本当に花だったのかもしれない。僕にとってだけでなく。

アンナ・ニコル・スミスへの憧憬

君はとても優しいからと、年老いた彼は口癖のように言います。望みは何でもきいてきました。目的は彼の資産。婚姻届が受理された夜、皺皺の手で執拗に乳房を弄りながら、彼は言いました。「君はとても優しいから、私が実は一文無しだなんて疑いもしなかったのだろうか？」

ふたりでおでかけ

薄い座布団がくくりつけられた自転車の荷台。それは幼い頃の私専用シートで、運転手は祖母。あれから約20年。変わらずふたりで出かけるけれど、自転車は自動車に、運転手は私になった。運転中、祖母は手すりを離さない。きっと私も、こんなふうにしがみついていたんだろうなあ。

しつこい男

節電営業のせいでぬるい空気がこもる、空港の喫茶店。

キンキンに冷えたアイスコーヒーを飲み込んだのと、

ガラスの壁を挟んでぶつかった視線を慌ててそらすカズヤを見つけたのは同時で、

そのどちらか、あるいは両方のせいで、ヨリエの背筋が一瞬で冷えた。

「ヨリエ？」

顔色が明らかに変わったのだろう、

向かい合って座っているアミが、心配そうにヨリエの顔を覗き込む。

カズヤの姿が二店舗隣のレストランに消えていくのを確認してから、ヨリエは口を開いた。

「一ヶ月くらい前に、カズヤっていう小学校の頃の同級生とばったり会ってね……」

あまりにも暑かったので、少し涼もうと思って入った図書館の入り口で、

ヨリエはカズヤに呼び止められたのだった。

カズヤとは、小学校を卒業して以来一度も会っていなかった。

最初は誰だかわからなかったが、垂れ下がった気弱そうな目もと、口もとや、

グズグズと鳴る鼻、話すときに身体をふらつかせるクセなどがそのまま、

すぐにカズヤだと思い出すことができた。

とはいえ、ヨリエはカズヤと特別仲がよかったわけではないどころか、

気持ち悪いと思って避けていたくらいなので、話すことは何もない。

相変わらず気持ち悪かったし、引きつったつくり笑顔で

「久しぶり。まだこの辺にいたんだ。じゃあね」

とだけ言って、さっさと図書館を後にした。

その日以来ヨリエは、行く先々でカズヤの姿を見かけるようになった。

それでも、駅やショッピングモールなどの比較的人が集まりやすい場所だったことと、

通っていた小学校の校区内ばかりだったことから、

気分は良くなかったが、単なる偶然だと思っていた。

しかし、今日は――

ヨリエは、台湾に占いの勉強をしに行くアミの見送りで、

自宅から車で2時間ほどかかる空港に来ている。

そこにカズヤが、ひとりで、手ぶらでうろついているのだった。

「絶対おかしいよね。

旅行だったら荷物あるだろうし、

いつもと同じよれよれの赤いシャツと黄土色みたいな短パンだしさー。

……やっばつきまとわれてんのかな」

「え～、それちょっとヤバくない？」

「私もアミと一緒に台湾まで逃げちゃおっかなーなんて……

あっ、出てきた」

眉間にしわを寄せたヨリエの目線を追ってカズヤの姿を確認すると、

アミも表情を曇らせた。

「……ああ、あの人が……」

「ね、キモいでしょ？

あんなのが行くところ行くところにいるんだよ。

しかもたまに話しかけてくるからさー、キモくてキモくて。

会話すぐぶった切るし、わざと聞こえないふりとかするときもあるんだけどさ、

普通そこまでされたら脈ないってわかるよね？」

「うーん……どうかなあ。

彼、自分の脈がもうないことすらわかってないよ」